特色 2

多面的・多角的に日本の歴史を捉える視点
文化史—伝統文化への関心を高める大迫力の資料

文化史のページでは，各時代の代表的な文化を**大きな図版で紹介**し，伝統文化への関心を高められます。

原寸大

1 歌舞伎の劇場　常設の芝居小屋が設けられ，質を高めるさまざまな工夫と演出が行われたことで，歌舞伎に対する人気はますます高まっていきました。観客は，一日中，飲食や会話をしながら歌舞伎を楽しみました。〈三代目歌川豊国作『踊形容江戸絵栄』東京都 江戸東京博物館蔵〉

2 東洲斎写楽が描いた歌舞伎の役者絵〈重要文化財 東京国立博物館蔵〉

3 江戸の本屋の様子　印刷や製本の技術が発達したことで，浮世絵や長編小説などの多くの出版物が発行され，ベストセラーも生まれました。安い値段で本を貸す店も増え，庶民に至るまで広く読まれるようになりました。〈京都外国語大学附属図書館蔵〉

縄文 BC / AD.1 弥生 2 3 4 古墳 5 6 飛鳥 7 奈良 8 9 平安 10 11 12 鎌倉 13 南北朝 14 室町 15 戦国 16 安土桃山 17 江戸 18 19 明治 20 大正 昭和 21 平成

江戸っ子を夢中にさせた娯楽と浮世絵

4 隅田川の花火大会　江戸時代になって合戦がなくなると，火薬の技術が花火に生かされ，観賞用の花火が各地へと広まりました。享保の飢きんの翌年には，死者の霊を慰める祭として，隅田川で花火が打ち上げられ，江戸の夏の名物となりました。火除地から盛り場に発展した両国橋の周りは，たくさんの人々でにぎわいました。〈歌川国虎作『江戸両国橋夕涼大花火之図』江戸東京博物館蔵〉

5 力士の土俵入り〈歌川国芳作『勧進大相撲土俵入之図』東京都立中央図書館特別文庫室蔵〉

江戸の人々は，どのようなことに夢中になっていたのかな。

歴史プラス 庶民の娯楽として根づいた大相撲

相撲は，初めは朝廷の年中行事でしたが，江戸時代になると，大名がお抱えの力士たちを競わせるようになりました。その後，土俵が造られ，寄り切りなどの技が生まれたことで，相撲を見る楽しみは増加し，庶民の娯楽として人気を得ました。また，相撲を職業とする人々も現れ，信濃（長野県）出身で松江藩（島根県）お抱えの雷電など，人気力士も誕生しました。

3 江戸の庶民が担った化政文化

狂歌
白河の清きに魚も住みかねて
もとのにごりの田沼恋しき

川柳
これ小判たった一晩いてくれろ
孝行のしたい時分に親はなし

俳諧
春の海ひねもすのたりのたりかな
菜の花や月は東に日は西に
行く春や重たき琵琶の抱きごころ
与謝蕪村

われときて遊べや親のないすずめ
雪とけて村いっぱいの子どもかな
小林一茶

「白河」は，元白河藩主（福島県）であった松平定信を，「田沼」は，田沼意次のことを指しています。

6 与謝蕪村（1716〜83）

学習課題 江戸時代後半には，どのような特色を持った文化が展開したのだろうか。

庶民による化政文化

江戸に経済の中心を移す田沼意次による政策（→p.136）に伴い，文化の中心も上方（→p.132）から江戸に移りました。このころ，貨幣の改鋳（→p.129）によって多くのお金が回り，大飢きんも起こらなかったため，裕福な町人だけではなく庶民も手にしたお金で娯楽を楽しむようになりました。火事が多い江戸に設けられた火除地は，人々が集まる盛り場となりました。[4] 19世紀初めの文化・文政期を中心に花開いた，江戸の庶民による文化を**化政文化**といいます。

歌舞伎[1]（→p.132）はさらに人気を集め，相撲[5]や落語を楽しむ寄席が庶民にも広く親しまれました。また，幕府の政治や庶民の生活を風刺してよむ**川柳**[史料]や**狂歌**[史料]が流行し，俳諧[史料]（→p.132）では情景を巧みに表現した与謝蕪村[6]や農民の感情をくみ取った小林一茶らが評判を得ました。

印刷技術の発達を背景に，浮世絵（→p.133）における錦絵とよばれる多色刷りの版画が登場し，歌舞伎の人気役者を描いた東洲斎写楽[2]や美人画

特色② 多面的・多角的に日本の歴史を捉える視点
文化史—文化が生まれた社会的背景がわかる本文

文化史のページでは，**文化の担い手や文化が生まれた社会的背景**について，それまでに学習してきた**政治や経済の内容と関連付けて解説**しています。政治・経済と文化を結び付けて理解することで，**日本の歴史を多面的に捉えることができます**。

文化の担い手がわかる工夫

▶本文やタイトルで**文化のおもな担い手がわかる**ようになっています。このため，**その時代の文化にどのような特色があったのか**がより理解しやすくなっています。

ページ	文化	おもな担い手
p.42-47	天平文化	天皇・貴族
p.52-55	国風文化	貴族
p.66-69	鎌倉文化	武士
p.88-91	室町文化	武家・公家・庶民
p.108-111	桃山文化	戦国大名・豪商

ページ	文化	おもな担い手
p.132-133	元禄文化	町人
p.138-141	化政文化	町人・百姓(庶民)
p.204-207	明治の文化	政府
p.224-227	大正・昭和初期の文化	大衆
p.274-277	戦後の文化	大衆

社会的背景がわかる本文

▶なぜその時代にそのような文化が生まれたのか，**因果関係を明確にして社会的背景がわかる**ようにしています。

p.138-139

p.140-141

庶民による化政文化　江戸に経済の中心を移す田沼意次による政策に伴い，文化の中心も上方から江戸に移りました。このころ，貨幣の改鋳によって多くのお金が回り，大飢きんも起こらなかったため，裕福な町人だけではなく庶民も手にしたお金で娯楽を楽しむようになりました。火事が多い江戸に設けられた火除地は，

化政文化が生まれた背景について，社会の安定と経済の発達により豊かになった庶民の存在があったことがわかります。

を描いた喜多川歌麿らが活躍しました。町人だけでなく，生活にゆとりが生まれた百姓も寺社参詣などの旅に出かけるようになり，葛飾北斎や歌川(安藤)広重は街道などの風景画を描いて人々の旅心をかきたてました。また，本も数多く印刷され始め，旅先での出来事や名所を描いた十返舎一九の『東海道中膝栗毛』は，旅の案内書として評判となりました。曲亭(滝沢)馬琴の『南総里見八犬伝』などの長編小説も多くの人々に読まれました。こうした印刷物や旅先での人々の交流によって，江戸の文化は地方にも伝わっていきました。

文化が地方に伝わった背景について，旅の流行や印刷技術の発達があったことがわかります。

学者たちは私塾を作って町人や百姓を交えて学び，長崎ではオランダ商館の医師シーボルトが蘭学者や医学者を育てました。

西洋の知識は測量術を進歩させ，伊能忠敬はその技術を基に正確な日本地図を作成しました。測量術や天文学が急速に進歩した背景には，外国船の来航により日本の地図を正確に作る必要があったことや，測量の基礎技術である和算が広まったこともありました。

測量術や天文学が進歩した背景について，外国船の来航などがあったことがわかります。

特色 2 多面的・多角的に日本の歴史を捉える視点
地域史—中央の歴史だけでなく地域史を重視

特設ページ「歴史を探ろう」

▶特設ページ「歴史を探ろう」では，地域の歴史を取り上げています。**当時の社会を地域の視点から見る**ことで，日本の歴史を多面的に捉えることができます。

▲p.200-201

本文で学んだことを具体事例を通じて深める「学習テーマ」

歴史を探る動機となる「疑問」

コラム「地域史」

▶コラム「地域史」では，本文と関連付けて，地域から日本の歴史を捉え直しています。

▲p.31　▶p.199

歴史を探ろう 掲載ページ一覧（12テーマ）

※**太字**：ここで扱っているページ

ページ	タイトル
p.32-33	古墳から分かる当時の様子
p.72-73	東アジアに開かれた窓口　博多
p.120-121	琉球とアイヌの人々の暮らし
p.130-131	昆布ロードと北前船
p.142-143	世界有数の百万都市　江戸
p.176-177	世界に開かれた港　横浜

ページ	タイトル
p.182-183	移住と開拓が進む北海道
p.200-201	**「絹の道」と日本の製糸業** New
p.228-229	発展する産業都市 大阪・神戸
p.240-241	**長野県から見る満州移民**
p.250-251	戦場となった沖縄
p.266-267	日本の領土画定と近隣諸国

▲p.240-241

「疑問」にわかりやすく答える「解説」

歴史の学習と地域を結び付ける「関連ページ」

地域史 掲載ページ一覧（18テーマ）

※**太字**：ここで扱っているページ

ページ	タイトル
p.31	**上野三碑に見る渡来人の影響** New
p.33	大きな古墳が集まる群馬県 New
p.51	蝦夷と東北の支配
p.68	大仏殿を失った「鎌倉大仏」
p.71	北と南を襲ったもう二つの蒙古襲来
p.79	北海道の独自の文化

ページ	タイトル
p.90	各地に広がった文化
p.100	鉄砲作りを支えた堺と国友
p.101	世界の銀を支えた石見銀山
p.113	鳥取藩の参勤交代
p.128	日光東照宮と街道の発達
p.136	財政改革に成功した米沢藩

ページ	タイトル
p.164	那覇と函館のペリー来航 New
p.173	士族の救済事業となった安積開拓 New
p.185	多摩地方の自由民権運動
p.199	近代化を支えた石炭と八幡製鉄所
p.199	**人口日本一だった新潟県**
p.267	小笠原諸島の返還

特色 2 多面的・多角的に日本の歴史を捉える視点
地域史—琉球とアイヌの人々の歴史を重視

琉球とアイヌの人々の一貫した記述

▶**琉球とアイヌの人々の歴史を古代から現代まで一貫して取り上げています。**
それぞれの文化や周辺地域との関わりについて深く理解することができます。

琉球とアイヌの人々の歴史 掲載ページ一覧

※**太字**：ここで扱っているページ

ページ	タイトル
p.78-79	**琉球とアイヌの人々がつなぐ交易**
p.118-119	**琉球王国とアイヌの人々への支配**
p.120-121	歴史を探ろう 琉球とアイヌの人々の暮らし
p.164	コラム 那覇と函館のペリー来航
p.180-181	沖縄・北海道と「近代化」の波
p.182-183	歴史を探ろう 移住と開拓が進む北海道

ページ	タイトル
p.227	見出し 見直される伝承や文化
p.250-251	歴史を探ろう 戦場となった沖縄
p.268-269	見出し 沖縄の復帰と基地問題
p.269	コラム 現在に残る沖縄の基地問題
p.281	**コラム 日本における先住民族**

中世

4 琉球とアイヌの人々がつなぐ交易

学習課題 琉球王国やアイヌの人々は、周辺諸国とどのような関係を築いたのだろうか。

東アジアをつなぐ琉球 琉球(沖縄県)の島々では、10世紀ごろに農耕が始まりました。14世紀半ばには北山・中山・南山の3王国が成立し、15世紀には中山の王である尚氏によって統一され、首里(現在の那覇市)を都とした**琉球王国**が成立しました。奄美大島から八重山列島に及ぶ地域がその領域でした。

琉球は、以前から東シナ海を舞台に独自の交易活動を行っていました。14世紀末に、明との朝貢貿易を始めた琉球は、日本・朝鮮・東南アジアの国々とも盛んに交易を行いました。琉球は琉球産の硫黄や日本の武具・屏風、東南アジア産の珍しい香辛料や象牙などを明に持っていき、その返礼として得た生糸や絹織物・陶磁器などを諸国に転売しました。日本の坊津(鹿児島県)・博多・兵庫・堺(大阪府)の商人たちも、琉球へやって来ました。

こうした中継貿易によって琉球王国は繁栄し、独自の文化を築き上げました。しかし、16世紀半ばになると、明の商人が国の規制を破って東南アジアへ盛んに進出するようになり、ポルトガル商人などの活動も活発になりました。その影響を受け、16世紀後半になると、琉球船の活動は衰えていきました。

アイヌの人々と交易 日本列島の北端では、狩りや漁を中心とした生活が長く続いていましたが、13世紀までには**アイヌ文化**が成立しました。蝦夷地(北海道)の**アイヌ**の人々は、樺太に進出し、アムール川流域と活発に交易・交流していました。

また、津軽半島(青森県)の十三湊も、アイヌの人々との交易地となり、北の日本海交通の中心でした。14世紀ごろには、領主である安藤(安東)氏の下で繁栄し、北方産の鷹や昆布・毛皮などが日本海交通によって京都などへ送られていきました。

やがて和人(本州の人々)は、蝦夷地の南部へ進出し、館とよばれる根拠地を造り、アイヌの人々と交易しました。15世紀半ば、和人の進出に圧迫されたアイヌの人々は、コシャマインを指導者として、和人と衝突を起こしました。この衝突から80年ほど争乱が続くなかで、和人の居住地は限定されていきました。その後しばらくは、アイヌの人々と和人の交易は安定したものとなりました。

地域史 北海道の独自の文化

本州が古墳時代から平安時代であった長い間、樺太(サハリン)から根室半島・千島列島に及ぶ地域にはオホーツク文化が、北海道のそれ以外の地域には擦文文化とよばれる独自の文化が、形づくられていました(→p.29)。擦文文化は、木片でこすった跡が残る土器(擦文土器)が出土することからこの名前が付けられ、やがてオホーツク海沿岸部まで広がりました。後に擦文文化はアイヌ文化へと発展していきました。

解説 蝦夷地

蝦夷は、古代に日本の東北部に住んでいた先住民を指して、和人が作った言葉です。蝦夷とアイヌの人々との関係は明らかになっていませんが、この蝦夷に由来して、北海道は蝦夷地とよばれていました。

第2節の問いを振り返ろう p.70~79 東アジアとの交流がこの時代の日本にもたらした影響とは何か、政治と経済の面から説明してみよう。

ヒント 日本は、特に中国とどのような関係を築いたかに、注目しよう。

▲p.78-79

近世

4 琉球王国とアイヌの人々への支配

学習課題 琉球王国とアイヌの人々は、薩摩藩や松前藩とどのような関係にあっただろうか。

琉球への窓口 薩摩藩(鹿児島県)は、明との貿易で栄えていた琉球王国(沖縄県)を1609年に支配し、検地を行って百姓から年貢米や布などを取り立てるなど、厳しく監督しました。

琉球は、明に朝貢し、明の文化や産物、海外情報を積極的に取り入れていました。それらは幕府や薩摩藩にとっても貴重であったため、明の後に出来た清とも、幕府や薩摩藩の管理の下で朝貢を続けることが認められました。琉球から中国へは、薩摩藩を通して入手した日本や蝦夷地の馬、硫黄、昆布・ふかひれ・なまこなどの海産物が輸出され、中国から琉球へは、絹織物・医薬品・茶・陶磁器が輸入されました。また、琉球特産の黒砂糖、漢方薬・染料に使われるウコンが盛んに作られ、琉球はそれらを薩摩藩の商人を通じて大阪で売り、そこで得た利益を中国との貿易資金にしました。

琉球からは、将軍が代わるごとに慶賀使とよばれる祝賀使と、琉球王が代わるごとに謝恩使とよばれる感謝の使節が江戸に派遣されました。薩摩藩は、これらの使節の行列を中国風に仕立てて行進させ、幕府と薩摩藩の権威が遠く琉球まで及んでいることを国内の人々に印象づけました。

蝦夷地への窓口 蝦夷地(北海道)の多くの土地にはアイヌの人々が暮らし、南西部の渡島半島には松前藩の和人の住む和人地がありました。アイヌの人々は、漁や狩りを行って にしん・鮭などの海産物や毛皮などを渡島半島や東北地方まで運び、和人と米・木綿・鉄製品などと交換していました。また、千島列島・樺太・中国東北部の人々とも交易していました。

松前藩は、耕地が乏しく冷涼な気候で米がとれなかったことから、年貢米による収入の代わりにアイヌの人々と交易し、その利益を得る権利を幕府から与えられました。

交易をめぐる衝突 松前藩の武士がアイヌの人々の住む地へ行って交易を行うようになり、品物を交換する際の比率がアイヌの人々にとって不利なものになると、松前藩への不満が高まりました。アイヌの人々は、かつてのアイヌ主体の交易を求め、松前藩と対立し、1669年に**シャクシャイン**を中心に立ち上がって戦いました。しかし、幕府の支援を受けた松前藩に敗れ、その結果、松前藩が交易の主導権を握るようになりました。18世紀になると松前藩の武士は、海産物の交易を大商人に請け負わせ、のちには漁場に多くのアイヌの人々が働き手として駆り出されることになりました。

第3節の問いを振り返ろう p.112~119 江戸幕府が安定した全国支配ができた理由を、統治のしくみと関係させて説明してみよう。

ヒント 江戸幕府が行った国内と国外の政策をそれぞれ確認しよう。

▲p.118-119

古代

2 ムラがまとまりクニへ

学習課題 日本列島のクニはどのようにまとまっていったのだろうか。

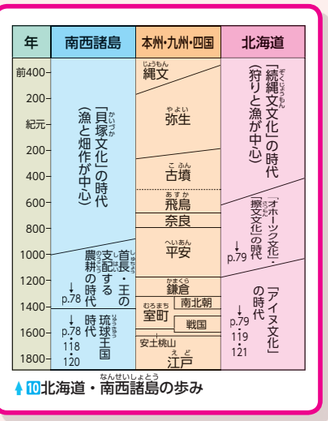
ムラからクニへ 稲作が盛んになると、人口が増加し水田も拡大したため、ムラとムラの間で土地や水の利用をめぐる争いが生じ、のがて環濠のあるクニ(国)が現れました。首長層の墓や墓域では、物見やぐらを備え、鏡と硬い剣に囲まれた大きな集落の発掘されれ、矢が刺さったままの人骨も見つかっています。これは、争いによりつのムラが周辺のムラを吸収してクニになった様子を示しています。

中国の歴史書(漢書)によれば、紀元前1世記ごろ、倭(日本)には100ほどのクニがあったとあります。また、1世紀半ばの歴史書(後漢書)には、奴国(現在の福岡市付近)の王が使に使いを送り、倭奴の金印を与えられたと書かれています。

中国は、魏のあと晋・宋・斉の三国時代となりました。そのうち魏の歴史書(魏志)倭人伝によると、3世紀に使は小さな国に分かれ、良い国をいがいたが、卑弥呼(女王)の統治する邪馬台国が他の国々にしたがっていたところ、争いが収まったあります。卑弥呼は、まじないによって、30ほどの諸国を治めました。また、中国に使者を送り、倭王に任ずる印を与えられました。

第1節の問いを振り返ろう p.28~29 日本列島の人々は、どのような生活や文化を築いてきたのだろうか。

▲p.28-29



年	南西諸島	本州・九州・四国	北海道
前400	「貝塚文化」の時代（漁と畑作が中心）	縄文	「続縄文文化」の時代（狩りと漁が中心）
200		弥生	
紀元			
200		古墳	
400		飛鳥	「オホーツク文化」・「擦文文化」の時代 ↓p.79
600		奈良	
800		平安	
1000	首長・王の支配と農耕の時代 ↓p.78		
1200		鎌倉	「アイヌ文化」の時代 ↓p.79 119 121
1400	琉球王国の時代 ↓p.78 118 120	南北朝 室町 戦国	
1600		安土桃山 江戸	
1800			

10 北海道・南西諸島の歩み

現代

未来に向けて

人権 日本における先住民族

1946年に北海道アイヌ協会(→p.223)は再結成されました。その後、1980年代に世界の先住民族が復権を訴え、動き始めたことにより、アイヌの人々もその流れに合流しました。1997年に、アイヌの人々の伝統文化を取り戻し発展させる「アイヌ文化振興法」が制定され、これにより北海道旧土人保護法(→p.181)は廃棄されました。

2007年に、国連総会で「先住民の権利に関する国際連合宣言」が採択されたことを受けて、08年、アイヌの人々を先住民族とすることを求める国会決議がなされました。政府は、日本が近代化する過程において、差別されたアイヌの人々が多くいた歴史的事実を認め、総合的な施策の確立に取り組むことを表明しました。この一環として、アイヌ文化を復興・発展させる拠点としての「民族共生象徴空間」の整備が決定し、国立アイヌ民族博物館と国立民族共生公園が北海道白老町に2020年に完成する予定です。また、政府はアイヌの人々の誇りが尊重される地域社会づくりに向けた「アイヌ施策推進法」を2019年に制定しました。

6 国立民族共生公園(イメージ) 民族共生象徴空間の愛称は、アイヌ語で「(大勢で)歌うこと」という意味の「ウポポイ」に決定しました。

▲p.281

ポイント

現代にいても、**最新の状況を取り上げています。**「未来に向けて」のコラムでは、沖縄の基地問題や、2019年に制定された**「アイヌ施策推進法」**について記述しています。

特色2 多面的・多角的に日本の歴史を捉える視点
歴史の理解を深めるさまざまな視点

文化史・地域史のほかにも，歴史の理解を深めるためのさまざまな視点を盛り込んでいます。
多様な立場や異なる見方を学ぶことで，歴史を多角的に捉えることができます。

異なる見方を示す資料

▶一つの歴史的事象について，**さまざまな立場の人々の見方を示す資料**を多く掲載しています。たとえば第二次世界大戦のページでは，人々が敗戦をどのように受け止めたか，異なる三つの意見を掲載しています。

▼p.252

それぞれの敗戦①

「戦争は終わってしまった?! 考えてもみなかったことが，とつぜんおこった。頭のなかが空っぽになった。眼の前が黒くなったり，赤くなったりした。冗談じゃないと思った。そんな馬鹿なことってあるか。この期におよんでなにごとだ。陛下，なぜ降伏したのですか。このわたくしは，いったいどうなるのですか。…中略…陛下，なぜ最後まで戦わないのですか。なぜ『朕のために死ね』とおっしゃらないのですか」
〈小熊宗克『死の影に生きて――中学生の勤労動員日記』より，一部要約・抜粋〉

それぞれの敗戦②

「友だちの中には泣いているひともあったが，私はくやしいとよりはもっと複雑な思いがしていた。それは戦争も『やめられる』ものであったのかという発見であった。私には戦争というものが永久につづく冬のような(そんなものは実際にありはしないのだが)天然現象であり，人間の力ではやめられないもののような気がしていたのだ」
〈北山みね「人間の魂は滅びない」『昭和戦争文学全集14』より，一部要約・抜粋〉

それぞれの敗戦③

「『よしよし。ところで，文子，今日は赤飯をたこうじゃないか。もっとも，敗戦を祝ったなんていうと人聞きがわるいから，名目は月おくれのお盆ということにするさ。本心は生き残ったことのお祝いということだがね。』…中略…夕食の膳に顔をそろえたとき，誰いうとなく，『おめでとう』をいう」
〈富塚清『ある科学者の戦中日記』より，一部要約・抜粋〉

多くの人物を掲載

▶学習内容に深く関わった人物を**「人物コラム」**で紹介しています(計49名)。
為政者だけでなく，地域で活躍した人や女性など，**さまざまな立場の人々を紹介**しています。
▶巻末には，教科書に掲載された**おもな人物のさくいん**を掲載しています(計318名)。
▶**小学校の社会科で学習する42人の人物**も，すべて掲載しています。

New

江藤新平
1834〜1874

近代日本の司法制度を整備

佐賀藩の出身で，新政府では近代国家建設で活躍しました。江戸を東京と改称して都の新設を提案したこと(→p.170)や民法の編纂に関わったこと，司法制度を整備し，裁判所を設置したことなどが業績として知られ，佐賀の七賢人としてたたえられています。しかし，江藤は征韓論をめぐり，西郷隆盛や板垣退助らとともに政府を去り(→p.179)，1874(明治7)年に士族の不満を訴えるため，佐賀の乱を起こしました。

▲p.175

New

山川菊栄
1890〜1980

男女平等の考えを広めた社会主義者

女子英学塾(→p.178)で外国の女性解放運動を学び，高い分析力と科学的な視点から「母性保護論争」に参加していきました。1921年には，日本で初めての女性による社会主義団体を結成しました。また，第二次世界大戦後には，労働省の初代婦人少年局長に就任しています。

▲p.231

「人物コラム」一覧(49名)

※**太字**：新しく追加された人物
赤字：女性

章(時代)	人物
第2部 第1章(古代)	孔子，シャカ，イエス，**ムハンマド**，鑑真，菅原道真，最澄，空海
第2章(中世)	平将門，源義経，足利義満，雪舟
第3章(近世)	千利休，山田長政，天草四郎，徳川綱吉，高田屋嘉兵衛，松尾芭蕉
第4章(近代前)	ワシントン，ナポレオン，マルクス，**ビスマルク**，高杉晋作，大塩平八郎，**大浦慶**，吉田松陰，福沢諭吉，**江藤新平**，西郷隆盛，大久保利通，**松浦武四郎**，**島義勇**，伊藤博文，**渋沢栄一**，正岡子規
第5章(近代後)	ウィルソン，ガンディー，原敬，**与謝野晶子**，平塚らいてう，**山川菊栄**，宮沢賢治，**山口淑子**，蒋介石，毛沢東，斎藤隆夫
第6章(現代)	吉田茂，湯川秀樹，手塚治虫

未来に向けて

人権　中世の老人と子ども，女性

絵巻物に描かれている子どもの姿を調べると，中世の子どもたちが，半ば遊びながら大人たちの仕事を手伝い，見習っていたことが分かります。なかでも，子どもたちにとって身近だったのは老人(高齢者)でした。老人は，子守などの育児を担っていたため，同じことを何度も聞きたがる子どもに，何度も何度も話を聞かせました。こうして昔からの知恵や知識は，老人から子どもたちへと伝えられたのです。また，子どもたちも，体が不自由になりがちな老人たちの世話や介護を担っていました。老人と子どもは，このような互いの働きかけによって，とても親密な関係にあったのです。

一方，古代から中世にかけて女性の地位は高く，財産を持つことや相続することも認められていました。また奈良時代までは，生まれた子は母親に属すると考えられていました。そのため，母方の姓を名乗る人も多く，『万葉集』(→p.47)などによれば，娘の結婚には母親の承認が必要でした。鎌倉時代以降に商業が発達し，市などが各地に出来ると，外で商いをする女性も数多く登場してきました(→p.80B3)。中世までは，このような女性の地位や権利が認められていました。

3 老人と子ども
絵巻には，子どもと老人の姿がよく一緒に描かれます。子どもが老人を助けています。
(『法然上人絵伝』京都市 知恩院蔵)

4 大原女　炭の産地であった京都北部の大原から，薪や炭などを頭上に載せて都まで売りに来ていた女性たちです。頭に手ぬぐいを巻き，筒袖を付けた独特な姿は，燃料に乏しかった都の人たちの心をとらえていました。(『七十一番職人歌合』(模本，部分)　東京国立博物館蔵)

▲p.83

未来に向けて

環境　現代社会の見直しを迫った東日本大震災

2011年3月11日，東北地方の太平洋沖を震源とする，日本の観測史上最大の地震が起きました。地震のあと，東北地方を中心に津波が襲い，死者・行方不明者は合わせて1万8千人以上という大きな被害が出ました。多くの人が家を失い，街全体に大きな被害を受けた地域もありました。

さらに地震と津波により，福島県の原子力発電所で事故が起こり，放射性物質が外部に漏れ出しました。放射性物質の広がりは，人々に健康や食品への不安を引き起こしました。事故を起こした原子力発電所周辺の住民たちの避難や，がれきや汚染水などの処理は今もなお続いています。

東日本大震災は，自然災害の恐ろしさとともに，「当たり前」と感じてしまう日々の生活の大切さを改めて考えさせました。地域社会のつながりや地域社会で共有された記憶の大切さも認識されました。また，この大震災を機に，エネルギーを大量に使う社会のあり方も議論されるようになりました。

4 東日本大震災の記憶を伝えるための石碑(宮城県女川町)　震災の時に小学6年生だった子どもたちが中心となり，震災の記憶を千年後に伝えるために「女川いのちの石碑」を建てました。

5 事故を起こした直後の福島第一原子力発電所

▲p.283

ポイント
持続可能な開発目標(SDGs)に関連する項目を示しています。

未来への視点を養うコラム「未来に向けて」

▶**未来の社会をつくるために参考となる先人たちの取り組み**を，環境・交流・人権・平和の四つの視点から紹介しています。

未来に向けて　掲載ページ一覧(43テーマ)

※**太字**：ここで扱っているページ

視点	ページ	タイトル
環境	p.51	自然を畏れ敬った古代の人々
	p.67	鴨長明が見た自然災害
	p.87	自然を生かした信玄堤
	p.127	森林伐採と植林
	p.143	江戸のごみを利用した農業
	p.153	工業の発達と生活環境の悪化
	p.203	公害の登場　足尾鉱毒事件
	p.205	ハーンと濱口梧陵の「稲むらの火」
	p.227	大都市を襲った関東大震災
	p.283	**現代社会の見直しを迫った東日本大震災**
交流	p.77	東アジアの美，磁器
	p.117	日本と朝鮮をつないだ倭館
	p.191	エルトゥールル号のきずな
	p.197	日本と中国をつないだ人々
	p.213	祖国の音楽を紹介したドイツ兵
	p.217	朝鮮との架け橋となった日本人
	p.226	人々を魅了した洋菓子文化
	p.278	世界に広がる日本の文化
人権	**p.83**	**中世の老人と子ども，女性**
	p.91	庭園造りで活躍した河原者
	p.125	差別された人々
	p.154	先住民の「涙の旅路」
	p.155	奴隷制を告発した『アンクル・トムの小屋』
	p.159	世界各地に広がる人権思想・民族意識
	p.163	渋染一揆
	p.171	差別からの解放運動
	p.184	「自由は土佐の山間より」
	p.187	日本での選挙の始まり
	p.206	差別された人々を描いた文学
	p.215	人種差別撤廃への道
	p.215	社会に羽ばたく女性たち
	p.223	全国水平社の結成
	p.265	在日韓国・朝鮮人
	p.273	男女共同参画社会へ
	p.281	日本における先住民族
平和	p.235	芸術に込めた反戦の意志
	p.245	ドイツのユダヤ人迫害に抵抗した日本人
	p.247	子どもの文化の変化
	p.251	語り継がれる沖縄戦
	p.258	旧日本兵の解放
	p.263	核兵器開発競争と日本
	p.269	現在に残る沖縄の基地問題
	p.275	言論の自由の回復と戦争へのまなざし